

中国近代小说的 私小说要素之考证

李 佳 著



对外经济贸易大学出版社
University of International Business and Economics Press

中国近代小说的私小说 要素之考证

李 佳 著

对外经济贸易大学出版社
中国·北京

图书在版编目（CIP）数据

中国近代小说的私小说要素之考证：日文 / 李佳著
· 一北京：对外经济贸易大学出版社，2020.3
ISBN 978-7-5663-2132-9

I. ①中… II. ①李… III. ①小说研究—中国—近代—日文 IV. ①I207.42

中国版本图书馆 CIP 数据核字（2020）第 041712 号

中国近代小说的私小说要素之考证

李 佳 著

责任编辑：刘 丹

出版发行：对外经济贸易大学出版社
社 址：北京市朝阳区惠新东街 10 号
网 址：www.uibep.com
资源网址：www.uibepresources.com

邮政编码：100029
邮购电话：010-64492338
发行部电话：010-64492342
E-mail：uibep@126.com

成品尺寸：170mm×240mm

印 张：15.75

字 数：242 千字

ISBN 978-7-5663-2132-9

印 刷：北京九州迅驰传媒文化有限公司

版 次：2020 年 3 月北京第 1 版

印 次：2020 年 3 月第 1 次印刷

定 价：63.00 元



前言

二十世纪初，中国学生大量前往日本，旨在通过学习实学来救国于水火之中。然而，在学习实学的过程中，他们也接触到了日本近代文学，最终使得一部分人放弃了原有的计划，走上了文学救国的道路。因此，在部分近代中国文人的文学作品中，存在着明显的日本要素。比如有学者指出，郭沫若、郁达夫等创造社初期成员，以及著名文学家鲁迅的文学作品，特别是小说，深受日本私小说的影响。

私小说，作为日本 19 世纪末 20 世纪初产生的一种文学形式，以其独特性而闻名于世。私小说不同于以往的小说，是以纂写作者的真实经历以及感受为主要内容，打破了小说的虚构性这一特点，颠覆了人们对于小说的固有认识。有学者指出，受上述私小说的影响，中国也出现了私小说作家，甚至形成了私小说派系，郭沫若、郁达夫、鲁迅等著名文人皆属于此派系。

然而，著者通过调查相关研究发现，郭沫若、郁达夫等创造社初期成员虽然创作了一系列的类似于私小说的身边小说，鲁迅也曾创作了部分含有自身经历以及感受的小说，后人称之为自我小说，但是在小说的主题、内容以及形式上，特别是隐藏在小说背后的中国要素等方面，身边小说和自我小说是与私小说有着本质上的区别的。

鉴于此，本书以身边小说、自我小说中的私小说要素为研究对象，在此基础上，重点剖析身边小说和自我小说对于私小说要素的吸收取舍的实态，从而了解中国近代文人对于日本文学，特别是小说文学的接受以及认知模式。

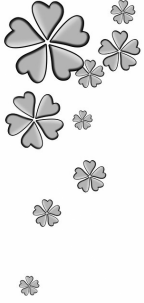
本书的主要内容包括私小说定义以及要素的研究、身边小说的特点以

及其中的私小说要素研究、自我小说的特点以及其中的私小说要素研究三大部分。在研究方法上，本书以理论与实践相结合为研究的指导思想，注重本体论与方法论的共鸣，以中日小说文学为基本立足点，融汇中日文化视域，采用多种有效的研究方法，将宏观与微观、抽象与具体有机地结合起来，从整体上系统地考察了身边小说、自我小说和私小说的内外在联系与区别。

本书是著者在博士课程期间，经过多年的研究编著而成，以博士论文的形式结题。但由于能力有限，疏忽谬误之处在所难免，恳望广大学者批评斧正。

著 者

2019 年初夏



目 录

序章	1
第一節 本研究の問題設定	1
第二節 本研究の研究対象・方法	17
第三節 本研究の構成	18
第一章 私小説の誕生と私小説をめぐる言説	21
第一節 自然主義文学から私小説へ	21
第二節 私小説の成立	23
第三節 私小説をめぐる言説	24
第四節 私小説の判断基準について－「現実依拠性」 を示すテキスト信号の存在における検証	35
第二章 私小説の読解過程とその判断基準について	39
第一節 一人称私小説における形式的「現実依拠性」 を示すテキスト信号の考察	43
第二節 三人称私小説における形式的「現実依拠性」 を示すテキスト信号の考察	56
第三節 「異例」な私小説	67
第四節 私小説の判断基準について－「現実依拠性」 を示すテキスト信号を手掛かりとして	69
第三章 中国の身边小説における私小説的要素	71
第一節 創造社について	71

第二節	創造社の身辺小説	72
第三節	郭沫若の身辺小説	75
第四節	張資平の身辺小説	110
第五節	郁達夫の身辺小説	161
第六節	身辺小説と私小説の関連性について	200
第七節	身辺小説における私小説の役割—私小説的要素の使用 を中心として	202

第四章 中国の新文芸における私小説の新研究—魯迅の自我小説を

	中心として	207
第一節	これまでの筆者の魯迅研究について	207
第二節	《呐喊》・《彷徨》の基本情報について	208
第三節	《呐喊》・《彷徨》の創作における魯迅の心境について	213
第四節	「髪」から見る「私」と魯迅の心境—《头发的故事》 を中心として	220
第五節	《在酒楼上》における作者と作中人物の心境について	227
第六節	《孤独者》における「私」・魏連殳・作者の心境— 「子供」に対する態度を手掛かりに	230
第七節	自我小説と私小説との関わりについて	235

終章

第一節	本研究の結論	237
第二節	これからの課題	238

参考文献(五十音順)

		239
--	--	-----



序章

第一節 本研究の問題設定

一 問題提起

二十世紀に入った後、中国から多くの学生が日本に留学し、そこで実学を学ぶことによって、祖国を救おうとした。しかし、実学を学ぶと同時に、彼らは日本で近代文学にも接触し始め、文学で国を救おうという考えが目覚めた。その代表の一人が魯迅である。そこで、筆者は拙稿「魯迅と日本の自然主義文学」^①において、魯迅の小説集《呐喊》・《彷徨》に収録される25篇の小説を対象として、魯迅の小説における当時日本の流行文学である自然主義文学手法の使用の検証を行った。その結果、魯迅の小説には自然主義文学手法が多く存在し、特に自然主義文学の後期である私小説的要素（例えば、作者は小説の中で、自分のことを書くなど）が色濃く表れていることが判明した。

しかし、日本の私小説的要素を自らの作品に活用するという傾向は、魯迅のみに現れた現象か、あるいは日本留学経験を持つ中国人留学生に共通する現象か、上記の考察では判断できない。

そのため、筆者が目にしたのは、大東和重「〈自意識〉の肖像—田山花袋『蒲団』と郁達夫『沈淪』」^②・王梅「田山花袋の『蒲団』と中国の現代文

① 拙稿「魯迅と日本の自然主義文学」（『国際文化研究』21、2015）153-166。

② 大東和重「〈自意識〉の肖像—田山花袋『蒲団』と郁達夫『沈淪』」（『比較文学』45、2002）

学」^①・趙敏「郁達夫における田山花袋の受容—「自我と自己周辺」の事実による創作方法の比較から」^②などの先行研究である。これらの先行研究において、中国の文学団体・創造社のメンバーである郁達夫の小説《沉沦》における日本の私小説作家・田山花袋の受容が検証され、郁達夫も私小説的要素を自らの作品に活用したことが述べられている。

また、鄭伯奇は、「《沉沦》は……彼（郁達夫）の個人生活を描く作品を代表する」^③と述べる。その上、鄭伯奇は、創造社同人の、同じく個人生活を中心としている作品を、「身边小説」と呼称しており、それは「自己身边の随筆的小説」であると述べる^④。

このように、創造社の身边小説は私小説と密接な関連性があると思われる。また、鄭伯奇は、郁達夫だけではなく、郭沫若・張資平など、創造社のほかのメンバーもかつて身边小説を創作したと述べる。鄭伯奇は郭沫若の小説を「二種類に分けることができ、一種類は……寄託小説であり、もう一種類は……身边小説である」と述べ^⑤、さらに、張資平の小説に対し、「帰国後、……彼の一連の身边小説が、この時期に創作された」と指摘する^⑥。よって、上記の疑問—中国近代小説における私小説の影響—を解くために、身边小説を考察することは有益であると筆者は考えている。

また、これまでの筆者の魯迅の小説における私小説的要素の考察は、ドイツの研究者である Irmela Hijiya Kirschner (イルメラ・日地谷=キルシュネライト、以下キルシュネライトと省略) の説によるものである。その説は主に以下のとおりである。

① 王梅「田山花袋の『蒲団』と中国の現代文学」(『東アジア日本語教育・日本文化研究』14、2011) 197-209。

② 趙敏「郁達夫における田山花袋の受容—「自我と自己周辺」の事実による創作方法の比較から」(『宇都宮大学国際学部研究論集』37、2014) 91-102。

③ 鄭伯奇《中国新文学大系・小説三集》導言〔初出：趙家璧編《中国新文学大系・小説三集》(上海良友图书公司、1935) 3-56〕、原文は饶鸿竟ほか編《創造社資料》下(福建人民出版社、1985) 732 より。

④ 饶鸿竟ほか編《創造社資料》下(福建人民出版社、1985) 731。

⑤ 饶鸿竟ほか編《創造社資料》下(福建人民出版社、1985) 731。

⑥ 饶鸿竟ほか編《創造社資料》下(福建人民出版社、1985) 733。

キルシュネライトは〈事実性^①〉と〈焦点人物^②〉という二つの要素から、私小説に定義を加えようとした。筆者はキルシュネライトが指摘した私小説の事実性と焦点人物という要素を中心として、二つの要素が魯迅の小説に存在するか否かを考察してきた。考察した結果、《呐喊》・《彷徨》収録される25篇の小説では、11篇に私小説的要素が活用されている事実が確認できた。小説集《彷徨》では3篇の作品にとどまったが、《呐喊》では14篇中8篇と、収録作品の過半数を超える強い影響が確認できた^③。

しかし、これまで筆者は拙稿「魯迅と日本の自然主義文学」において、私小説の事実性における考察については、作者の実生活・実体験という客観的な事実情報^④に絞って考察しただけである。一方、私小説の事実性とは、「作品は、作者が経験した現実を直接再現している」^⑤ので、小説の中で再現したものは、作者の経歴などの客観的な事実情報だけでなく、「心境」という主観的な事実も同時に再現したと思われる。そのため、魯迅の小説の主人公の思想・心境が、当時の作者の思想・心境と一致するののかについては、まだ検討の余地を残している。

一方、これまでの研究では、前掲11篇の魯迅の実体験・実生活が書かれ

① イルメラ・日地谷=キルシュネライト著、三島憲一ほか訳『私小説 自己暴露の儀式』（平凡社、1992）239、240。原文：「事実性」とは、日本の読者の視点から見て想定される、文学作品と実際の現実との関係を言う。それは、「作品は、作者が経験した現実を直接再現している」との想定を表現している。したがって、「事実性」とは、文学とそこに反映している現実との関係……を指すものではなく、むしろ文学的コミュニケーション過程におけるある了解を言う。すなわち、作家が特定のテキスト信号によりそれと分かるようなかたちで作品の「現実依拠性」を示し、それに対して読者があらかじめ信頼を置いていることを言うのである。」

② イルメラ・日地谷=キルシュネライト著、三島憲一ほか訳『私小説 自己暴露の儀式』（平凡社、1992）249-260。原文：「焦点人物」は、一人称の語り手と主人公と作者との単なる連合体以上のものである。……「焦点人物」とはむしろ、私小説に固有の、一つのテキスト構成組織を指す。この「焦点人物」は、作品のあらゆる重要なレベルや観点においてその存在を証明することができる。……（そのレベルや観点は）語りの視点〔共有の視点〕、……時間構造〔ともに歩む語り手の立場〕、……筋書きのレベル〔主体と経験的現実との間の感情的把握された関係〕。」

③ 拙稿「魯迅と日本の自然主義文学」（『国際文化研究』21、2015）153-166参照。

④ ここの客観的な事実情報とは、小説の中で、魯迅の実体験が「私」の身に設定される、若しくは小説の主人公の身に設定されていることである。

⑤ イルメラ・日地谷=キルシュネライト著、三島憲一ほか訳『私小説 自己暴露の儀式』（平凡社、1992）239、240参照。

ている小説を〈自我小説〉と呼ばれている研究は存在する。例えば、彭丹は「魯迅の自我小説における「私」」において、以下のように述べる。

「自我小説」とは日本文学の「私小説」の中国語訳である。それは、作者自身を主人公として、実生活や実体験を描き、自らの心境や内面を追究するジャンルの小説である^①。

上記のように、彭丹は「実体験や実生活」・「心境」から自我小説を定義し、自我小説を私小説の訳語として認識する上で、『頭髮的故事』・『兎和猫』・『社戯』など、筆者が検証した客観的な事実情報を持つ魯迅の小説が自我小説であると主張する^②。

しかし、自我小説と私小説の同義性を主張する彭丹の研究に対し、筆者は懐疑的である。なぜなら、これまでの筆者の考察によれば、上記の11篇の自我小説には、魯迅の実体験・実生活が存在することが判明したが、心境の有無はまだ不明である。前述のように、私小説には、主人公の心境＝作者の心境という特徴が存在するため、心境を考察しないまま、自我小説を私小説の訳語として扱う上記の研究は、信憑性に乏しいと思われる。

一方、魯迅の自我小説に関する研究をさらに調査してみると、例えば、周硯舒の〈魯迅的自我小説与日本大正时期私小説之比較〉では、魯迅の自我小説について、以下のような記述がある。

魯迅の自我小説は……日本の私小説から影響を受けた。自我小説は……魯迅の個人生活から離れていない。……個人の世界に執着し、自我の声に傾く私小説と異なり、……魯迅は（自我小説において）……「鮮明な現実主」を表し、……「私（作者魯迅）の目

① 彭丹「魯迅の自我小説における「私」」（『アジア文化との比較に見る日本の私小説』、2008）103。

② 彭丹「魯迅の自我小説における「私」」（『アジア文化との比較に見る日本の私小説』、2008）103、104 参照。

に映った世界」に注目している^①。

上記のように、周硯舒から見ると、自我小説は私小説と同じように、作者の個人生活が書かれる一方、個人ではなく、個人によって観察した世界を描くことに力点が置かれている。その上、周硯舒は同じく客観的な事実情報を持つ魯迅の小説を自我小説であると主張する^②。

また、周硯舒のほか、李明は〈魯迅的自我小説与日本近代文学〉において、前掲の客観的な事実情報を持つ魯迅の小説を同じく自我小説であると主張する上^③、以下のように述べ、自我小説と私小説の差異を指摘する。

魯迅の「自我小説」は日本の「私小説」と類似性を持つと同時に、差異も存在する。……魯迅は……「個人によって一時代の社会生活を反映する」ことを主張する^④。

上記のように、李明は「社会生活を反映する」ことによって、魯迅の自我小説と私小説を区別している。このほか、鄧華は〈魯迅自我小説的叙述代言人解析〉において、「「自我小説」は……日本の私小説から……大きな影響を受けた」^⑤と指摘し、自我小説と私小説の関連性を指摘するものの、同じく自我小説と私小説を区別していることが読み取れる。

このように、魯迅の実生活・実体験が書かれている自我小説を私小説の訳語として使用する研究がある一方、自我小説と私小説を区別する研究が多数存在する。また、前述のように、これまでの筆者の研究では、魯迅の小説における主人公の心境と魯迅本人の心境が一致するののかについては、まだ考察されていないため、筆者は本研究において、行論の便宜上、上記の周硯舒らの研究と同じように、自我小説と私小説を区別し、前掲の客観

① 周硯舒〈魯迅的自我小説与日本大正时期私小説之比较〉（《内蒙古大学学报》45（3）、2013）29。

② 周硯舒〈魯迅的自我小説与日本大正时期私小説之比较〉（《内蒙古大学学报》45（3）、2013）25 参照。

③ 李明〈魯迅的自我小説与日本近代文学〉（《魯迅研究月刊》8、2001）23 参照。

④ 李明〈魯迅的自我小説与日本近代文学〉（《魯迅研究月刊》8、2001）24、25。

⑤ 鄧華〈魯迅自我小説的叙述代言人解析〉（《湖南科技学院学报》27（8）、2006）9。

的な事実情報を持つ、魯迅の実生活・実体験が書かれている小説を自我小説と呼称する。

二 身辺小説・自我小説と私小説に関する先行研究について

問題提起では、筆者は身辺小説・自我小説と私小説の間に、密接な関連性があることを提示した。次に、これまでの身辺小説・自我小説と私小説の関連性に関する先行研究をまとめてみたい。

(一) 身辺小説と私小説の関連性に関する先行研究

身辺小説と私小説の関連性について、これまでの先行研究は、主に二つの傾向があると思われる。それは①身辺小説と私小説の類似に関する議論、②身辺小説と私小説の差異に関する議論である。以下から、身辺小説と私小説の関連性に関する先行研究を紹介しながら、その問題点を提示したい。

① 身辺小説と私小説の類似に関する議論

身辺小説と私小説について、曾慶瑞は〈浅议郭沫若早期‘身边小说’独特风貌〉に、以下のように述べる。

郭沫若……が描いた平甫・愛牟・K君・「私」は、つまり彼自身である。これは郭沫若が当時の日本の「私小説」から影響を受けた結果である。また、当時創造社の全ての「身辺小説」が「私小説」の影響を受けたとも言える^①。

上記の資料の下線部を見ると、曾慶瑞は小説の主人公＝作者という点から、郭沫若の身辺小説が私小説の影響を受けたと主張する。しかし、小説の主人公＝作者という身辺小説と私小説の類似する現象から、影響論に辿り着くまでには、その影響論を証明する論証が必要であると思われる。そ

① 曾庆瑞〈浅议郭沫若早期‘身边小说’独特风貌〉、乐山师专郭沫若研究室編《郭沫若研究论丛》第2輯に収録（四川大学出版社、1988）160。

のため、上記の説の信憑性に対し、筆者は懐疑的である。

また、卞立強は「中国と日本の文学における作家の自我—私小説を中心として」において、身边小説と私小説の関連性を以下のように述べる。

中国にも私小説が出現したが、そのような私小説作家の多くはいずれも日本に留学したことがあり、日本の私小説の影響の下に一連の私小説を書いたのであり、中国の文壇において独特な私小説派が形成され、……そのうち最も大きな影響を及ぼしたのは郁達夫と郭沫若などを代表とする創造社であった^①。

上記の論述では、卞立強は創造社を中国の私小説派代表であると主張するほか、身边小説を私小説まで呼称したが、前掲の曾慶瑞と同じように、具体的な論証を行っていない。

次に、桑島道夫は「郁達夫・その「告白」のかたち：「沈淪」「蕙蘿行」を中心として」で、郁達夫の身边小説と私小説の関連性を、以下のように述べる。

郁達夫は『沈淪』を創作する際、自己周辺の事実を小説中に登場させ始めた。……自分の家族、特に母親を作品にまで登場させることは田山花袋と同じく勇気をふるっての結果ではないかと考えられる^②。

上記の論述では、桑島道夫は郁達夫の身边小説『沈淪』を以て、「自己周辺の事実を小説中に登場させ」と「自分の家族、特に母親を作品にまで登場させる」という創作方法から、小説創作における郁達夫と私小説作家である田山花袋の類似性を指摘する。

① 卞立強「中国と日本の文学における作家の自我—私小説を中心として」(『研究論叢』37、1991) 308。

② 桑島道夫「郁達夫・その「告白」のかたち：『沈淪』『蕙蘿行』を中心として」(『人文論集』50 (2)、1999) A108。

一方、武継平は『異文化のなかの郭沫若—日本留学の時代』で、郭沫若の身辺小説と私小説の関連性について、以下のように述べる。

郭沫若の 1924 年夏から秋にかけて書かれた小説の特徴は、「小説の素材をほとんど暖めないままですぐに使ってしまうという、意識的に私生活と文学創作との歩調を合わせることである。」……伊藤整は私小説について「生きる方法が文学の方法となる」と述べているが、私たちは伊藤氏のいう私小説の方法論のなかに、郭沫若の「自叙伝小説」の創作方法の原点が求められる^①。

このように、武継平の説によれば、郭沫若が 1924 年夏から秋にかけて書かれた小説^②は私小説と同じように、作者は自分の生活体験を小説の素材にする際、できるだけ近いうちに経験したことを使用しているため、創作方法において、身辺小説と私小説は類似性が存在すると思われる。

また、武継平のほか、大東和重は「郁達夫における志賀直哉の受容—自伝的文学とシンセリティ」において、以下のように述べる。

郁達夫はその作風から、日本の私小説に影響を受けたと論じられてきた。例えば竹内好は早くに、「彼の作品はすべて自己の生活、感情の告白を出でない。新文学中ただ一人の正しい私小説（むしろ日本的な）作家である」と指摘する^③。

上記の記述によれば、大東和重は「自己の生活、感情の告白」という類似点から、郁達夫の小説における私小説の影響を主張する。しかし、その影響論を支える論証が同じく示されていない。

① 武継平『異文化のなかの郭沫若—日本留学の時代』（九州大学出版社、2002）264、265。

② 武継平『異文化のなかの郭沫若—日本留学の時代』（九州大学出版社、2002）264によれば、郭沫若の 1924 年夏から秋にかけて書かれた小説は『行路難』である。また、鄭伯奇によれば、『行路難』は身辺小説であるため、武継平はここで創作方法における郭沫若の身辺小説と私小説の類似性を述べていると思われる。詳細は本研究の第三章第三節参照。

③ 大東和重「郁達夫における志賀直哉の受容—自伝的文学とシンセリティ」（『近畿大学語学教育部紀要 6（2）、2006）66。



さらに、蔡震は「郭沫若與日本」で、以下のように述べる。

日本の自然主義文学思潮は彼（郭沫若）への影響が明らかであり、彼の身辺小説・日記体小説の創作もその影響の中にある^①。

蔡震は郭沫若が日本の自然主義文学の影響を受けたと主張するが、日本の自然主義文学は前期と後期に分かれ、前期は社会批判的性格と告白的性格が共存したものの、後期は告白性の強い私小説になってしまった^②。蔡震は郭沫若が日本の自然主義文学の影響を受けたと述べるが、その影響がどの時期の自然主義文学かを示していない。

このほか、趙敏は「郁達夫における田山花袋の受容—「自我と自己周辺」の事実による創作方法の比較から」で、身辺小説と私小説の関連性について、以下のように述べる。

同時代の作家である沈從文は、郁達夫の文学について「自然主義の文学」であると評価し、「彼の創作方法は終始一貫している」と指摘している。日本においても、同時代の作家金子光晴は「彼の作品は日本の小説とよく似ている。感情的で日本の私小説そっくりだ。」と自らの感想を語っている^③。

上記のように、趙敏は沈從文と金子光晴の論述に従い、郁達夫の小説における日本の自然主義文学と私小説の影響を指摘する。しかし、既に前述したとおり、日本の自然主義文学と私小説は同義語ではなく、それぞれの特徴を有しているため、日本の自然主義文学と私小説を同義語として扱うという趙敏の説に、筆者は懐疑的である。

以上、これまで身辺小説と私小説の関連性に関する先行研究をまとめた。

① 蔡震「郭沫若與日本」、岩佐昌暉・藤田梨那・武継平編『郭沫若の世界』（花書院、2010）に収録、9。

② 日本の自然主義文学について、第一章第一節で詳述。

③ 趙敏「郁達夫における田山花袋の受容—「自我と自己周辺」の事実による創作方法の比較から」（『宇都宮大学国際学部研究論集』37、2014）95。

これまでの研究では、身边小説と私小説の関連性を示す論証が不足している、あるいは日本の自然主義文学と私小説を混同して使用するという問題が存在する。そのため、筆者は本研究で、これまでの研究の問題点を解明した上で、身边小説と私小説の関連性を明らかにしたい。次に、これまでの身边小説と私小説の差異に関する研究を紹介したい。

② 身边小説と私小説の差異に関する研究

身边小説と私小説の差異について、中国側の研究を見ると、例えば、劉元樹は《郭沫若創作得失論》で、郭沫若の身边小説と私小説の差異について、以下のように述べる。

作者（郭沫若）は「私小説」の身边雑事をしばしば描写するという制約を突破し、自己悲劇の社会根源を掘り出した。彼は自分を暗い社会現実に置き、生活に困窮して流浪する売文生活の苦痛を打ち明けながら、国に愛する強い情熱を以て反動的な制度と民族圧迫を強く訴えてきた^①。

上記の論述によれば、郭沫若は身边小説において、私小説と同じように自我に執着するのではなく、その自我を描くことを架け橋として、当時の社会現実を暴露しようとしていたと考えられる。

一方、日本では、蔡曉軍は「創造社文学の形成と日本一同人と日本との関わりを中心に」で、以下のように、民族に関わる主観的な情緒を以て、身边小説と私小説を区別しようとしていた。

田山花袋の『蒲団』以来の小説は、もっぱら作者自身の身边のことだけに局限され、……このもっぱら自己に執着し、社会の在り方を切断した意識は日本文壇の特殊性としか考えられない。……

① 刘元樹《郭沫若創作得失論》（四川文艺出版社、1993）370。